

事例研究

全員参加型授業を目指して

—— 国際関係論（東北アジア）を中心に ——

范 力

A Lesson Improvement: Case by Introduction
to Small Group Discussion

Fan Li

はじめに

筆者は2004年度から本学経営学部非常勤講師として国際関係論（東北アジア）を担当してきた。初年度の04年を除くと、前期は本校舎で、後期は東校舎で授業を行ってきた。半期・2単位ということなので、指を折って数えると、今年で4年目になるが、授業は7回目に当たる。また、授業を持ち始めてから、年に2回の受講生アンケートによる授業評価を受けてきた。学生による授業評価の是非について賛否両論があるが、白鷗大学を含むほとんど全国の大学で実施されている現状を考えると、学生評価の導入はそれなりの理由があろう。ちなみに、私の場合は学生の評価が次第によくなってきていると思う。たとえば、昨年度前・後期の授業アンケートでは次のような学生の感想が寄せられた。

中国の料理や舞踊（踏）などをちょっとだけでも取り入れれば、もっと授業が楽しくなると思いますよ！日本の外交とニュースはほんとう駄目ですが、これからも日本を温かい目で見てもらえたらうれしいです！

ありがとうございました。 （前期・経営学部学生）

すばらしい講義でした。大学に入って一番やる気が出る講義でした。
いろんな工夫のこもっている、心のこもっているすごい講義でした。
(後期・法学部学生)

仮に、前者の評価に比べて、後者の評価が高かったならば、前期の学生に感謝しなければならない。なぜなら、後期に前期の学生の要望を授業に取り入れたからである。

大学全入時代に入ることにつれて、大学間の競争が激しくなる一方である。そうしたなかで、地方の大学はいうまでもないが、いわゆる東京の大学でさえ、さまざまな工夫が求められている。そこで、いかに魅力のある大学をつくれるかが鍵になろう。そのうち、教員の授業力アップ、つまり学生をひきつける能力が重要なポイントになってくると思われる。

日本の学生は教室で手を上げて質問することに違和感をもっているので、私はリアクションペーパーを配ることにしている。したがって、私の授業はいつも学生からの質問に答えるいわゆる質疑応答から始まるのである。ここでのリアクションペーパーは単に出席カードでないことはいうまでもない。

実は、私はシラバスに授業要項も成績評価の方法や基準も書いてあるし、また初回授業は学生諸君にも配布することになっている。そこで、質問や感想は評価上で20%を占めると書いてある。なお、履修のポイント・注意点のところには、講義を聴いて、文字で自分の考えをまとめること、積極的に質問・発表することなどをも書いてある。言い換えると、授業は一方的な積み込み方式をなるべく避け、学生の自発的な学習を促す意味が認めら

れている。

質疑応答以外に、私はグループディスカッションを意識的に授業に取り入れている。たしかに、日本文化の特徴の一つは集団主義にある。集団主義は日本をここまで大国化してきた（浜口恵俊『間人主義の社会日本』東洋経済新報社、1982年などを参照されたい）。そこで、伝統的な集団主義を生かしながら、グループディスカッションを授業に取り入れたらどうかと考え始め、試みることにした。そのうちの一つは授業の活性化にある（「グループディスカッションの極意」、<http://www.co-education.com/knowhow/base04.html> を参照されたい）。

最後に、学生の活用。大学は教員が教え、学生が学ぶという場所とわれわれは思い勝ちである。たしかに、教員が教え、学生が学ぶという要素は大きい。しかし一方、学生の立場に立ってみると、勉強は多くの意味が含まれるはずである。たとえば、知識の勉強ももちろん勉強である。それとともに、子供（一人前ではないという意味）から大人（社会人）へと成長していく中で、どうあるべきかという勉強も含まれるであろう。したがって、単に知識の勉強の手伝いをするだけでなく、子供から社会人になるための勉強にも協力して上げる必要がある。そこで、専門知識の学習はもちろんのこと、成人になるには表現力を含め、さまざまな能力を養うことも必要である。その能力を養成するには受け身としてのみでなく、時々積極的に授業に参加することも当然求められる。問題は学生が積極的に授業に参加する場を提供するかどうかということだと思う。そこで、私がゼミとは一味違うグループディスカッション等を用いることにしたのである。

以下は私が担当している国際関係論（東北アジア）という科目の2007年度前期分のリアクションペーパーをもとに、主に1. グループディスカッション、2. 学生の活用（プレゼンなど）、3. 質疑応答の3点に分けて議論を進めていきたい。

1. グループディスカッション

まずグループディスカッションとは何かが問題になる。グループディスカッションという表現は決して珍しくはなく、この白鷗大学の紀要にもとりあげられたほど身近なものと見受けられる（確か昨年だったと記憶しているが、グループディスカッションについての論文が発表された）。しかし、グループディスカッションは、実際に、授業に取り入れられることはあまりなかったという結果が、受講生から回収したリアクションペーパーで分かった。

次に私のグループディスカッションの方法および手順を簡単に紹介しておこう。

- (1)まず授業の最初に、教員があるテーマを決め、学生にそれに関する簡潔なプリント（前もって用意しておいたもの）を配布する。
- (2)次に、プリントを学生に読ませ、学生諸君のそれぞれの考えをリアクションペーパー（表）に書いてもらう。
- (3)その次に、数名1組（グループ）になって、それぞれの書いた内容を順繰りに読み上げてもらう。その後、大きな紙（前もって用意しておいたもの）にグループ全員の考えをまとめてもらう（メンバーのそれぞれの名前と意見およびグループの意見まとめ）。
- (4)その次に、各グループでそれぞれ一人の代表を選んで（方法は自由）、グループ全員の考え（ポイントのみ）をクラスで発表してもらう。この際に、できれば、字のきれいな学生を指名して、黒板にポイントを書いてもらう。
- (5)最後に、各グループの発表をよく聴いた後、学生諸君に授業感想や質問などをあらためてリアクションペーパー（裏）に書いて、提出してもらう。

大勢の人の前でスピーチするのは勇気がいる。しかし、聞き手（学生数）が少なくなると、スピーチはしやすくなる。グループディスカッションの特徴はいくつかあるが、そのうちの一つはクラスをいくつかのグループに分けることにあり、人数が少ないほど積極性が増すと思われる。ある学生はレポートで次のように書いている。

学生の意見を聞くに当たって、一般的には手を挙げてみんなの前で意見を述べさせることが多い。しかしながら、最近の学生の中には自ら挙手をして発表する人はほとんどいないに等しいだろう。それは良くないことではあるが、グループディスカッションのように少人数の中であればそれほど苦に感じることはなく、また、その中で自分の意見を述べると同時に他の学生の意見も聞くことができることは一石二鳥である。私が一学生として実際にこの方法で授業を受けた感想としても、教壇に立ってみんなの前で話すよりもリラックスして話せるので、自分の素直な意見をみんなに伝えることができていたと思う。ただ単に先生の講義を受けるよりも、きちんと意見を持って考えることでしっかりした知識が身についた気がするし、何より他の意見も聞くことで新しい視点から物事を考えることができるようになる（12040339）。

なぜグループディスカッションを授業に取り入れるかは以上の学生のレポートで明らかだが、私の教育理念（えらそうにきこえるが）とも関係している。

私は教育理念をいつも授業の最初に学生に話すことにしている。タイトルは「教育と人格者」である。人格者と聞くと私たち庶民とかけ離れた雲の上の人のように思わせるかもしれないが、とんでもない誤解である。胸を張って言うが、私の授業の真髄はこの「教育と人格者」にあるのである。では、私の教育理念とは一体どういったものなのか？

繰り返しになるが、学校は教員が教え、学生が学ぶところと考えられ勝

ちである。確かに、いままでの学校はそういった性格が強かった。しかし、この考えは通るとしても、かたよった言い方という気がしてならない。なぜならば、学校、特に大学の場合、「勉強」二文字のみで大学生活を片づけられないのが明白な事実であるからだ。たとえば、部活とかサークルとか、あきらかに普通の勉強とは異なる。また、勉強に限って言っても、方法は多種多様である。積み込めという伝統的な教育法もあれば、学生の能力をのばす教育法もある。私が試みているのは後者である。

私もかつては学生だった。また、リアクションペーパーを通して今の学生の心理もよく把握していると自負する。そこで、まず授業の楽しさに注目し、そして、学生を活用するグループディスカッションを取り入れたのだ。グループディスカッションのさまざまなメリットはあとで説明するが、ここで一つ指摘しておきたいのは普通の授業と違って、教員と学生と一緒に授業をするという点である。大学はみんなの会合の場だと私は思っている。そこで、勉強もあれば、付き合いもある。教わることもあれば、教えることもある。友人もできる。自分を高めるところでもある。自分を高めるところである以上、体験がきわめて重要だと思われる。この意識に基づいて、私は教育が知識・道徳・体育の三育ではなく、知恵・感情・意志の三育を提唱し、実験を重ねてきた。グループディスカッションはまさに私の教育理念を実現する一つの手段である。

以上、簡単でありながら、私の教育理念を紹介した。では、この教育理念が具体的にどのように授業に組み込まれているかを見てみよう。まず私の初回授業で学生に配布したプリントを参考のために、掲載しておこう。

第1講 オリエンテーション

1. 講義目的

- (1)国際関係論（東北アジア）という科目を通して東北アジアのことをより深く理解していきます。
- (2)学生諸君の表現力を養います。

2. 講義内容

- (1)この時間は主に中国と日本及び朝鮮半島との関係を考えます。
- (2)具体的な内容については別紙の「講義目次」を参照してください。

3. 講義の進め方

- (1)講義
- (2)質疑応答
- (3)発表
- (4)グループディスカッション
- (5)ビデオ鑑賞
- (6)その他

4. テキスト

毎回プリントを配ります。

5. 成績評価の方法・基準

- | | |
|------------------|-----|
| (1)出席： | 20% |
| (2)質問や感想： | 20% |
| (3)レポート： | 20% |
| (4)グループディスカッション： | 15% |
| (5)小テスト： | 15% |
| (6)発表： | 10% |

6. 履修のポイント・注意点

- (1)講義等を聴いて、文字で自己の考えをまとめること
- (2)積極的に質問・発表すること
- (3)参考文献を読むこと

范 力

7. 科目内容の位置づけ

異文化理解と異文化コミュニケーションに役立つ授業にします。

8. 関連科目

他の国際関係論との平行履修が好ましい。

2007年度国際関係論（東北アジア）

講義目次（変更あり）

- | | |
|------|------------------------------------|
| 第1講 | オリエンテーション |
| 第2講 | 教育と人格者（講義1） |
| 第3講 | 教育と人格者（続き・講義2） |
| 第4講 | 日中関係を考える：「共同声明」をめぐる（グループディスカッション1） |
| 第5講 | 日中関係再考 |
| | 1. なぜ中国が日中戦争にこだわるか（小テスト1） |
| | 2. 歴史認識とODA（学生発表1・ビデオ鑑賞1） |
| 第6講 | 日中関係の現状と今後（学生発表2） |
| 第7講 | 東北アジアにおける台湾問題について（講義3・発表3） |
| 第8講 | 日朝関係を考える（グループディスカッション2） |
| 第9講 | 韓国人からみた日本と朝鮮半島との関係（ビデオ鑑賞2） |
| 第10講 | 私から見た日朝関係（講義4） |
| 第11講 | 六ヶ国協議について（学生プレゼンテーション1） |
| 第12講 | 東北アジア人の思考法およびその将来（講義5） |
| 第13講 | 講義を振り返って（グループディスカッション3） |
| 第14講 | レポート提出（1） |

第1講のオリエンテーションはこの授業のシラバス及び講義目的などを説明している。そのなかで、講義の目的は東北アジアをより深く理解することと学生の表現力を養うことにある、と書かれている。また、科目内容

の位置づけは異文化コミュニケーションに役に立つ授業にすると書いてある。なお、履修の注意点は文字で自分の考えをまとめることとある。そして、成績評価はグループディスカッションが20%を占めるともはっきり書いている。

シラバス等を見れば、グループディスカッションは授業に組み込まれていることがわかる。つまり、グループディスカッションは授業の一環である。では、実際に、グループディスカッションを行って、学生はいかなる反応を示したかについて見てみよう。

今期14回授業のうち、グループディスカッションはあわせて3回行った。これから順にしたがって、学生に出してもらったリアクションペーパーを引用しながら、学生のリアクションを見ることにしよう。なお、大江画之新君（11050612 経営学部3年）が1回目のグループディスカッションをまとめてくれたことを断っておこう。ではまず、1回目の学生のリアクションペーパーを詳しく見てみよう。

1. 1 回目のグループディスカッション（5月10日、4 回目の授業で）

1 回目のグループディスカッションのテーマは「この国際関係論（東北アジア）の授業で何をとりあげるべきか」である。まず、まとめた項目をリスト・アップしておこう。

東北アジアの授業で何をとりあげるべきか。

- ・日本や中国、韓国それぞれの外交姿勢の違いについて
- ・なぜ中国や韓国は著作権などの知的財産権を侵害するのか
- ・六ヶ国協議の重要性と現状
- ・日本とアジア諸国との関係
- ・北朝鮮の核開発問題

- ・なぜいま東北アジアという地域を世界的に注目されているのか
- ・東北アジアの国々がどのように交流していけば、より地域の結びつきが強まるか
- ・靖国問題を通しての国際関係
- ・他の国々から見た日本
- ・なぜ竹島、北方領土などの領土問題があるのか。その原因から考える
- ・どのように交流すればスムーズに国家間うまくいくのか
- ・北朝鮮の核保有問題や閉鎖的な部分をどのように切り開いていくか
- ・巨大な勢力を持つ国々と日本はどのように関係を持つべきか
- ・外交関係や各国の歴史
- ・日本とロシアの関係
- ・各国の政治、経済の特徴や難点、国民生活などの現状
- ・広大な地域区分である東北アジアという名称の政治的、経済的意味とは
- ・日中間の経済面での関係をより深く築くために必要なこと、考え方
- ・各国の歴史認識、文化、教育方針の違いについての比較
- ・東北アジア各国が抱えている諸問題への解決策を考える
- ・潜在的能力の発見
- ・欧米との対決
- ・自由主義と社会主義との違い
- ・各国の性格、関係
- ・過去の歴史を通して、国際関係のいまと昔を比較
- ・第三者の視点による日本の歴史問題
- ・なぜ日本が環日本海と表記すると問題なのか
- ・韓国が東海であると主張した理由、目的は何か
- ・なぜ六ヶ国協議が北京で行われているのか
- ・中国、日本、韓国、北朝鮮、ロシア、アメリカの共生、平和、安定と経済文化等の交流拡大について

以上列举した項目は、すべて学生が思いついた内容であることに注目していただきたい。もちろん、「講義目次」や先ほど触れた「東北アジア」などの資料はすでに学生に配布済みであることは言うまでもない。したがって、それらが参照されたことは容易に想像がつこう。それにしても、出された項目は参考資料を上回ったので、学生の東北アジアへの関心度の高さをうかがうことができよう。

また、このクラスに留学生がいるので、グループディスカッションを通して日本人学生間だけでなく、留学生と日本人学生との意見交換ができたことも特筆しておきたい。たとえば、ある留学生はこう書いている。

日中関係や問題など理解しなくてはいけないと思っている。中国や日本や朝鮮半島は第二次世界大戦が原因で不愉快、不理解あるいは反感などいろいろあって、この国際関係論を手段として、相互関係をわかっていきたい。また、中国のいまの経済成長により、軍事力や経済力が強くなっている。その強さゆえに今後アジア地域で不安定要素が増えるのではないかと懸念する人もいる。そういう心配が相互の不理解によるものだと認識する。また、日中だけでなく、東北アジア、アジア、世界との関係、経済や文化を理解する必要がある。今日の世界では、BRICsと呼ばれる新興国のうち4分の3がアジアの国々である（この言い方が正しいかどうかは別にして）。世界におけるアジアの地位は高まっているのが一目瞭然で、互いにつながりを深くしていく必要がある（13072025）。

では、この1回目のグループディスカッションを経て、特にリアクションペーパーのまとめを通してどんなものが得られたのか。

今回まとめてみて、日本人は自分たちが脅威に思ったりして、領土問題、拉致問題などされてきたことばかり関心が強いと思った。留学生は

東北アジアのことから、世界の動向などテーマから、大きく展開できていると私たちは感じた。そして、報道されているような反日でもなく、互いに分かり合おうとする姿勢を見ることができたと思う。実際、私たちはこの授業がきっかけで中国、台湾の留学生と友達になることができた。

このことから、私たちは少しでも多くの話し合う場をもつことで、互いに不理解、誤解を解き、分かり合うことができるはずであると確信することができた。だからぜひ、これからもグループディスカッションなどを通して、多くの学生がふれあえる場を提供していただきたい(11050612)。

学生はグループディスカッションを通して、この授業は何をとりあげるべきかを真剣に考え、意見交換ができたように思える。また、自分は考えもしなかったことを他人の発表により聴けたので、視野を広げたというのは予想していたが、留学生と友人になれたことは大きな収穫といえよう(友人をつくることは私の教育理念に合致するものである)。

何よりも、大学では新鮮な授業を体験することができたと学生は実感できたと思われる。

2. 2回目のグループディスカッション(6月7日、8回目の授業で)

2回目グループディスカッションのテーマは「日朝関係について」である。授業の最初に学生に配布した資料は「日朝平壤宣言」である。議論を順調に進めるために、まず学生に配布した「日朝平壤宣言」を掲載しておこう。

日朝平壤宣言

小泉純一郎日本国総理大臣と金正日朝鮮民主主義人民共和国国防委員長は、2002年9月17日、平壤で出会い会談を行った。

両首脳は、日朝間の不幸な過去を清算し、懸案事項を解決し、実りある政治、経済、文化的関係を樹立することが、双方の基本利益に合致するとともに、地域の平和と安定に大きく寄与するものとなるとの共通の認識を確認した。

1. 双方は、この宣言に示された精神及び基本原則に従い、国交正常化を早期に実現させるため、あらゆる努力を傾注することとし、そのために2002年10月中に日朝国交正常化交渉を再開することとした。

双方は、相互の信頼関係に基づき、国交正常化の実現に至る過程においても、日朝間に存在する諸問題に誠意をもって取り組む強い決意を表明した。

2. 日本側は、過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明した。

双方は、日本側が朝鮮民主主義人民共和国側に対して、国交正常化の後、双方が適切と考える期間にわたり、無償資金協力、低金利の長期借款供与及び国際機関を通じた人道主義的支援等の経済協力を実施し、また、民間経済活動を支援する見地から国際協力銀行等による融資、信用供与等が実施されることが、この宣言の精神に合致するとの基本認識の下、国交正常化交渉において、経済協力の具体的な規模と内容を誠実に協議することとした。

双方は、国交正常化を実現するにあたっては、1945年8月15日以前に生じた事由に基づく両国及びその国民のすべての財産及び請求権を相互に放棄するとの基本原則に従い、国交正常化交渉においてこれを具体的

に協議することとした。

双方は、在日朝鮮人の地位に関する問題及び文化財の問題については、国交正常化交渉において誠実に協議することとした。

3. 双方は、国際法を遵守し、互いの安全を脅かす行動をとらないことを確認した。また、日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないように適切な措置をとることを確認した。
4. 双方は、北東アジア地域の平和と安定を維持、強化するため、互いに協力していくことを確認した。

双方は、この地域の関係各国の間に、相互の信頼に基づく協力関係が構築されることの重要性を確認するとともに、この地域の関係国間の関係が正常化されるにつれ、地域の信頼醸成を図るための枠組みを整備していくことが重要であるとの認識を一にした。

双方は、朝鮮半島の核問題の包括的な解決のため、関連するすべての国際的合意を遵守することを確認した。また、双方は、核問題及びミサイル問題を含む安全保障上の諸問題に関し、関係諸国間の対話を促進し、問題解決を図ることの必要性を確認した。

朝鮮民主主義人民共和国側は、この宣言の精神に従い、ミサイル発射のモラトリアムを2003年以降も更に延長していく意向を表明した。

双方は、安全保障にかかわる問題について協議を行っていくこととした。

日本国総理大臣 小泉 純一郎

朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長 金正日

2002年9月17日平壤

http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/s_koi/n_korea_02/sengen.html

テーマを決めてから、授業をよりスムーズに進行させるため、「日朝関係をどう思うか、かりに、問題があれば、それを書きなさい、またその解決策をも考えて欲しい」、というプリントを配布した。2回目ということもあって、グループディスカッションのやり方にも慣れてきたのか、あるいはテレビの報道に影響されすぎるせいなのかははっきりと分らないが、しかし学生は熱心だった。次に各グループのまとめ（大きな紙より、以下同じ）を紹介したい。

グループ A

- 学生 1 北朝鮮の人は反日感情が強く、日本人は反朝鮮感情がない
- 学生 2 過去に日本は朝鮮にひどいことをしたのだろうけど、いまの日本には関係のないことだからつかかってこないでほしい。朝鮮人がもっと大人になればよいと思う。
- 学生 3 朝鮮人側には日本との相互理解の関係を築こうという意味が感じられない。平和の維持をおびやかしているのは朝鮮そのものではないか。
- 学生 4 様々な問題は協議だけで、解決するものではなく、双方の国民の意識から改善すべき。
- 学生 5 日本は過去の過ちに対して謙虚に受け止めて反省したりしているのに、朝鮮は良い方向に改善しようとしている姿勢がみえない。
- 学生 6 朝鮮の人は日本への悪いイメージがあり、これは国そのものが豊かにならないと変わらない。国が豊かになれば、人の心も豊かになり、そうなれば過去も許せるようになると思う。
- 学生 7 核問題は最大の問題である。日本と朝鮮が安全でフェアな、よい関係を築くためにも、核放棄が最も近道。

以上の学生諸君の問題意識が正しいかどうかは別にして、日朝関係およびそれについての考えをそれぞれもっていることが見て取れる。とりわけ、このグループは最後に「朝鮮人側の意見を聞いてみたい」とあるので、日本側の解決策を提示しただけでなく、北朝鮮人の考えをも聴いてみたいということで、希望が持てた内容だったといつてよかろう。

グループ B

問題点

- ・ 拉致問題
- ・ 核問題
- ・ テポドン
- ・ ぜいたく品の輸出停止
- ・ 国民の貧富の差が激しすぎる
- ・ 金総書記への忠誠心が異様である
- ・ 話し合いができない
- ・ 日本の世論は関心がない、政府が弱気であいまい
- ・ 他国と協力したりして、信頼関係を築こうとしない

解決策

- ・ 時間をかけ、より多く話し合いの場をもつべき
- ・ 一国民として話の内容を理解する必要がある
- ・ 核兵器の保持、北朝鮮の経済などについて日本だけでなく、他国、国連とともに世界一丸となって北朝鮮を変えていくようにすべき
- ・ 日朝間で互いが譲るべきところは譲り、求めるべきところは求めるという関係を築くべき
- ・ もっと互いに心を開くべき
- ・ 積極的に交流——良いところを探す

- ・北朝鮮内の貧富の差、格差をなくすべき。
- ・六ヶ国協議（を通して問題解決を図る）

このグループの意見ではすでに言及された核以外に、拉致問題などもあげられている。しかも、解決策として日朝間の妥協が必要というのはグループ A の意見より一歩踏み込んだものと考えられる。

一方、次のような極端的な意見も見られた。

グループ C

問題点

- ・金正日が調子にのっている。
- ・にせ札
- ・麻薬
- ・人権
- ・ミサイル
- ・在日朝鮮総連を通じた日本への工作活動

解決策（ある学生のリアクションペーパーより）

- ・太陽政策の責任を韓国に行わせる
- ・外からのプレッシャーをかけ、制裁をかける
- ・洗脳からのリハビリを行うべし
- ・話し合いが通じる国ではないため援助して延命に必死な韓国に責任も含め丸投げし、国際社会が手を引く。それで解決しないときは、半島を海の藻くずに変える
- ・最終手段としての戦争。そして、それを回避するための、多国間協議を行う
- ・韓国の様に太陽を当てるのではなく、北朝鮮は小さい子供のように、

次から次へと要求し、その要求が叶えば、さらに要求をエスカレートさせるという悪いくせをもっている。金一族とりわけ金日成、金正日を神格化させ、プロパガンダなど徹底的に行っていて、国民の思想に関しても「朝鮮民主主義人民共和国」の名に恥じる政策を行っている

- ・ 日本から手をさしのべるのは拉致問題が全面解決してからでなければ
- ・ 盗人に追い銭無意味。東北アジアに横たわる諸問題のなかで、中韓両国のロビーストによってアメリカ世論、政府の考え方に変化が生じ、北朝鮮問題の本質がぼけてきているものを、いま一度意思統一を図らなければならない。

このグループの意見は論理的であって、また首尾一貫性があるような気がする。その辺は評価したい。しかし、一方、偏っているという嫌いもあるかもしれない。なぜならば、極端に言うと、この延長線上にあるのは金正日政権の崩壊・レジーム・チェンジか戦争するしかないということになるからである。しかし現に、そういう可能性はまったくといっていいほどないのである。

いずれにせよ、2回目のグループディスカッションのテーマは「日朝関係」ということもあって、各グループは真剣に取り組めた。また、各グループは問題提起だけでなく、解決策まで考えることによって、活発に議論することや積極的な授業参加もできたし、充実感のある授業にもなったと学生たちは感じたと思われる（リアクションペーパーを参照されたい）。

ちなみに、グループディスカッション後の私のフォローや「韓国人から見た日本と朝鮮半島の関係」あるいは「拉致問題の解決に向けて」というその後の私の講義（後述）などによって、日本人の立場や視点だけでなく、中国人や韓国人の立場や視点も知ることができた。これは学生の視野を広げることにもつながるし、後に行われる六ヶ国協議の前触れにもなったと考えられる。

3. 3回目のグループディスカッション（7月12日、13回目の授業で）

今回のテーマは「この授業を振り返って」ということで、学生諸君は授業に出て、よかった点と改善すべき点とを授業を振り返りながら、議論してもらった。本当は授業に出た以上それぞれの授業に対する考えを学生諸君はそれぞれもっているはずであるが、就職活動などに忙しく、出られなかった一部学生のことを考えて、あらためてそれまでの授業目次という資料を配布した。

次に一部のグループのまとめた内容を紹介しておこう。

まず、よかった点から見てみよう。

- ・この授業でしかできない学生同士によるグループディスカッションは全員参加型の授業での一番の特徴だと思った。そして、自分だけでなく、他の人の意見を聴くことができ勉強になった。
- ・ディスカッションを重ねることにより、互いのコミュニケーション能力を養うことができた。
- ・毎回自分の考えを書くことによって、考える力や表現力が身についたと思う。
- ・話し合いによって、考えを言葉にして表現する力がついたと思う。
- ・グループディスカッションをすることで、他の人の考えも聴けるし、自分の意見を口にすることで頭の中で整理できたのでよかった。
- ・グループディスカッションがあり、自分たちで授業に参加できたこと
- ・グループディスカッションをもっと増やしてもいいと思う
- ・グループディスカッションで話し合いの時間がもてた
- ・話す力がアップした
- ・自ら考えることができた
- ・表現力がアップした
- ・学生の能力をのばす講義内容だった

- ・先生から一方的な講義ではなく、自分で考える能力がつけられた
- ・授業中にグループで話し合い、一つの結論を導き出すことが、いままで受けた授業にはなかったスタイルで集中できた

以上は学生に寄せられたグループディスカッションの長所であった。まとめると、次の通りである。

- ①教員と学生と一丸となって授業に取り組めること
- ②学生は自ら考えこと、その考えを文字にすること、そしてその文字を口で話すことができること
- ③自己主張のみでなく、他人の意見も聴けることにより、視野を広げることができること
- ④自分の考えを修正しつつ、より良いものにしていくこと
- ⑤グループで一つの作業を共同でこなす練習にもなること

以上のような学生の声は素直なものであると私は受け止めている。それは私の授業の進め方を評価してくれたというより、学生諸君がグループディスカッションを通して自らいろいろな能力をつけたことの表れにほかならないと思う。学生に力を伸ばす場を提供するグループディスカッションという授業の進め方は効率のよいものであることを確信するに至った。

次に、改善すべき点を見てみよう。すでに述べたように多くの学生にとって、グループディスカッションは初めての体験であるため、新鮮であるとともに、チャレンジでもあった。教員の私にとっても、クラスの人数やディスカッションのテーマ等によって大きく反応が違ってくるので、挑戦であり続けることは変わらない。では、このクラスの学生はどういった意見をもっていたか。リアクションペーパーを見てみよう。

- ・グループディスカッションにもう少し時間をとってほしかった
- ・グループディスカッションのメンバーを先生がランダムに選んだほう

がいい

- ・グループディスカッションの時間制限は効率が悪かった
- ・もう少し内容の濃いグループディスカッションをしたかった
- ・意見を一つにまとめる人がなかなか決まらない
- ・グループディスカッションでの発表を1日で終わらず、翌週までに調べてまとめて発表すると、もっとよい発表ができると思う
- ・グループディスカッションの段取り手際があまり計画的でない
- ・グループディスカッション時の時間配分を見直して、全グループの発表を聴きたかった
- ・講義ごとにグループのメンバーが決まってしまうので、1年生から4年生まで交えて毎回グループを入れ替えると新しい意見を聴くことができると思う
- ・グループディスカッションをもっと増やして、コミュニケーションを多くとりたい

以上の意見をまとめると、次の通りである。

- ①時間配分が合理的ではないこと
- ②グループのメンバーを入れ替えるべき
- ③グループディスカッションの回数を増やすこと

まず、時間の配分であるが、大人数のクラス（今学期の履行者は143名だが、毎回約120名出席）だったので、正直にいうと、90分の時間はきつかった。したがって、多くの時間をとって、より実りのあるグループディスカッションにしたかったという意見には同感である。この点は本当に反省すべきである。「せっかく、みんなで時間をかけて、議論したのに、最後に発表する時間がなかったら、もったいない」という学生の指摘に全く賛成である。今後、授業にグループディスカッションを取り入れる際に、もっと時間配分を合理的に考えていかなければならない。

また、「1日で終わらせず翌週まで時間を使う」という意見もあった。確かに、そうすればあわせて180分の時間があるので、より内容の濃いグループディスカッションができるはずである。しかし一方、授業自体は1回のうちにその内容を終わらせないと、効果が悪くなってしまうという恐れが出てくるかもしれない。長い時間をかけた、より内容の濃いグループディスカッションか、それとも効率よく時間的に緊張感のあるグループディスカッションかは難しいチョイスといえる。言い換えると、それは時間と効率とのバランスをいかにとるかという問題なのかもしれない。場合によっては、1回は180分のグループディスカッションをし、1回は90分のグループディスカッションをするという試みもしてみたらいいかもしれない。おそらく、これはクラスの数など授業環境等の要素によって変わると思われる。

また、グループのメンバーの入れ替えについて。大体、仲のよい学生同士が同じグループにいる。仲の良い学生同士だから、話しやすい側面もある反面、異なる考えが出づらいという側面もあろう。たとえば、次のような考えもあった。

グループディスカッションは最初の授業に、あらかじめグループを5個くらいつくってしまうことで、次のグループワークの時に、グループをつくる時間が短縮されるし、同じ人と作業することで、効率よく意見などをまとめられると思います。毎回、同じ人ではなく、違う人と意見交換することは、重要なことなのですが、知らない人ということでののか、よく分かりませんが、授業内の話し合いでなかなか意見が出なくて、(出ても)まとまらず、あまりよくできたと感じなかったのも、私は同じグループでの作業でやっていきたいと思いました(12040148のレポートより)。

同じメンバーでいくか(話しやすいし時間を有効に使える等)、それと

もメンバーチェンジするか（緊張感も沸くし、違う意見も聴けるし、より多くの友達もできる）は難しいところである。二者択一ではなくて、使い分けしたら、いいかもしれない。

グループディスカッションをもっと増やすことに関しては、これもやはりクラスの数に大きく左右されると思われる。

以上の意見は、どうすれば、グループディスカッションをよりスムーズに進められるかという内容が殆どであった。その割合は履修者の99%以上を占めた。一方、今期回収したレポート（130人分）のうち、グループディスカッションに反対意思を表わした学生が1人いた。130分の1という本来なら無視しても良いくらいであるが、貴重な意見だったので、詳しく検討しておこう。

グループディスカッションだが、これは激しく疑問を覚えた。1人1人が意見を考え→複数人でそれをまとめる→発表→自分以外のグループの意見を聴いたうえで、さらに個々人でまとめに入る、というのがだいたいの流れだったが、正直なところ、発表の段階で各グループの意見の重複が非常に目立ったように思うし、そもそも国際関係論という題目の講義で、講義のあり方それそのものに関してディスカッションするのはどこか筋違いであるように思えてならない。意見の重複に関していえば、あれだけの人間がいれば、意見が似たり寄ったりになるのは必然だし、そのうえ授業内容に関してはあまり突飛なことは言い難いし、国際問題についてディスカッションするにしろテーマ自体がいまさら過ぎる話題なので、独特な意見が出辛い、というのが原因だろう。解決策としては第1に参加する人数の制限が考えられるが、学生全体の不公平を生むのでこれは却下となる。第2にはテーマの方向性を変えること。講義それ自体をテーマにするのは、前述のとおりあまり学生にとってためになるディスカッションにはなり得ないと思うので不必要。デリケートな国際問題をテーマにすると、議論する自体があまりにいまさらで、テレ

ビなどのメディアですでに投げあうだけのディスカッションしかならな
いだろうし、新たな知識・概念の獲得につながり難いだろうと思われる
のでやるべきではないと思う（11053132）。

以上は今年度前期授業でのある学生のレポート内容の一部である。レポ
ートのテーマは「私が講師だったら、国際関係論（東北アジア）をこう進め
る」である。

真正面から私の試みに反対する学生である。率直に言って、当初愉快で
はなかった。しかし、これは学生が私に与えられた課題を真剣に考えた結
果ではないか、また一部の学生がインターネットから写して、プリント・
アウトだけのレポートよりはずっとよかったのではないか、という見方に
落ち着いたのである。

まず、この学生の意見を整理しよう。彼がグループディスカッションに
反対する理由は二つあった。一つは学生の意見が重複すること、もう一つ
は国際問題でいまさら過ぎた話題を議論するのは新たな知識・概念の獲得
につながりがたいこと。1 番目の意見の重複については、彼自身も書いた
ように「あれだけの人間がいれば、意見が似たり寄ったりになるのは必然
だ」と認めている。ここは主に 2 番目の問題について考えてみたい。

「講義内容自体をテーマにするのは学生にとってためになるディスカッ
ションにはなり得ない」について。正直に言うと、私がグループディスカッ
ションを授業に取り入れた際に、一番悩んだのはテーマそのものである。
なぜなら、グループディスカッションではテーマが最も重要であるからだ。
したがって、指摘されたように、あたっている部分があると素直に私は認
める。以上、述べたように 3 回のグループディスカッションのうち、1 回
目（この授業で何を取り上げるべきか）と 3 回目（この授業を振り返って）
は講義自体をテーマにしていた。

しかし一方、「講義自体をテーマにするのは学生にとってためになるディ
スカッションにはなり得ない」となると、それは違うと思う。繰り返しに

なるが、学生たちの積極的なアクションはこれを如実に物語っている。私にとっては言うまでもないが（特に3回目のグループディスカッション）、学生にとって、講義自体をテーマにするのもためるディスカッションである、という意見もあった。

また、1回目のテーマは「この科目は何を取り上げるべきか」という根本的な課題から考えることによって学生に強く印象づけられる狙いがある。そして、3回目のテーマは「この授業を振り返って——良かった点と改善すべき点」は授業をふりかえるとともに、頭で整理してもらうという思惑もある。それは簡単に言うと、①東北アジアにおいて、いかなる問題が存在しているか、②またそれらの問題の解決策は何なのか、を学生に考えてもらうものであった。

「デリケートな国際問題をテーマにすると、議論する自体があまりにいまさらで、テレビなどのメディアですでに投げあうだけのディスカッションしかならないだろうし、新たな知識・概念の獲得につながり難いだろうと思われるのでやるべきではないと思う。」

ここは「古いこと」（いまさら、テレビなどのメディアですでに投げ合うディスカッションしかない）の不要論と、新しい知識や概念の獲得が重要と強調されているような気がする。しかしそもそも日朝関係（2回目のグループディスカッションのテーマ）は昔から存在していることである。その日朝間にある問題も、いまだに解決されていない。したがって、古いことだからという、不要論には私は組しない。むしろ、逆である。つまりある程度わかるから、議論しやすい側面もあるのだ。

たしかに、日朝関係はここ数年よく日本のマスコミに取り上げられている。しかし、残念なことに、解決せずに投げ捨てられたものだらけだと私は見ている。この学生はよくテレビを見ているようで、「テレビなどのメディアですでに投げ合う」を書いたのだ。しかしそのテレビが必ずしもすべて正しいことを伝えているとは限らないということに気付いていないようである。むしろ、より深くほりさげて問題の本質に接近することが求め

られよう。

私は百数十名の履行者のうち、たった一人に反対意見があるからといって、グループディスカッションを取りやめるつもりはまったくないし、またそうすべきではないと思う。グループディスカッションの目的とは何かということをあまり理解していないのが私の感想である。ちなみに、この学生は3年生で、14回授業のうち、欠席3回。そのうち、1回目のグループディスカッションを含まれる。出席したグループディスカッションの2回とも、他の学生とグループになって、ディスカッションしたことがなかったようである。つまりグループディスカッションに参加していなかったということになるのである。

繰り返しになるが、グループディスカッションの目的は新しい話題に関する話し合いでもなく、グループディスカッションの目的は学生の授業参加にあり、スキル・アップにあり、友人をつくることにある。したがって、発表の段階での意見の重複はもちろん問題の本質でもないし、国際問題だから、グループディスカッションはできないという理由もない。グループディスカッションは、私の授業の特色として多くの学生に評価されていることはすでに述べた通りである。現に、当学生もレポートの最初に次のことを書いている。

この国際関係論（東北アジア）は自分が受けてきた講義のなかでは、楽しかったと呼べる類の内容だったように思う。楽しかったというのは難しいかやさしいかとは少し異なる基準で、要するに内容に興味がもてるかとか、あるいは授業に出ようと思えるかというような学生側の積極性を左右するような要素だろう。

ゆえに、自分がこの講義に何かしら改造を施すならば、そういう楽しさを生かしていく方向にしたい。というのは山々であるのだが、この講義のもつ楽しさというのは講師のキャラクターに依存するところが非常に大きかったと思うし、自分ではそのキャラクターは出せないとも思う。

このように、自分が手法に疑問を感じたグループディスカッションの有無に関して以外、内容の傾向について少し改める余地があることは感じたが、講義全体の手法について改変しようとは思わない。完成された手法とまではいわないが、自分のような学生に不満を感じさせないこの講義のあり方は、なるべくそのままにしておいたほうが良いだろう。

問題はグループディスカッションを行う際に、もっと慎重にやるべきだということでは謙虚に受け入れる。

要するに、グループディスカッションに反対する意見もあったが、それに比べると、賛成意見のほうが圧倒的な多数を占めた。その理由は学生が書いてくれた。最後になるが、3回目のグループディスカッションを終えてから学生のリアクションペーパーとレポートの一部を掲載しておこう。

今日はいろいろな人の意見が聴けたいグループ・ディスカッションだと思った。この授業はいろいろと勉強になった授業だと改めて感じた。ただ机に向かってひたすら勉強しているような授業よりも、いろんな人と話し、吸収できるこの授業をいろんな人に知ってもらいたいと思った。高校とは違う大学の授業はおもしろかった (1206029)。

今日はみなさんの話を聴いて、多くの意見が聴けてよかったと思う。中国人（教員の私と中国人留学生のこと）の話も聴いて、おじいさん（聴講生）の戦争のときの話も聴けた。とても印象深い授業になったと思う。先生の授業の進め方は、時間がたらなくなって、発表できないグループがあったりしたが、そういう授業も、あっていいと思う。この授業は楽しく勉強できた。ありがとうございました (12060153)。

私がこの授業で最も良かったと考えているのがグループディスカッションだ。他の授業ではほとんどないといってよく、4年生の私でも今まで

の3年間に何らかの授業でグループディスカッションを行った覚えがないほどだ。ただやはり大学生であるわけであるし、これから社会に出て行く人間として、このような試みをするのはもちろんプラスになるに違いない。それに、私にとって自分の意見とは違った意見を知るためのすばらしい機会であり、私だけでなく他の人にも言えることとして、自分の意見を述べることによって、表現力・コミュニケーション能力を培えたのではないかと思う（11041979レポートによる）。

2. 学生の活用（プレゼンなど）

私の授業のもう一つの特徴は学生によるプレゼンテーションである。特筆すべきは第11講（6月28日）の模擬六ヶ国協議である。六ヶ国協議とは主に北朝鮮の核開発問題に関して、解決のため日本、アメリカ、北朝鮮、韓国、中国、ロシアの6ヶ国が直接協議を行うものである。ここ数年、核問題以外に、日本人拉致やミサイル発射など、北朝鮮に関するニュースや番組が日本のマスコミに溢れている。したがって、普段、政治に興味に示さない大学生でさえ北朝鮮についてはある程度の知識をもっているのだ。

ちょうどその時、六ヶ国協議の再開が取りざたされていた最中であった。そこで、私が10回目の授業が終わった直後、それまで毎回授業に出た18名の学生を指名し、3人ずつでそれぞれ日、米、朝、韓、中、露各国の代表になりきって、それぞれの思惑・立場を調べさせ、そして、28日の第11講模擬六ヶ国協議で、プレゼンテーションすることになったのである。

学生は日本の立場や思惑はある程度知っているかもしれないが、日本以外のアメリカ、中国、韓国、ロシアの思惑や立場、特に北朝鮮の代表になりきって物事を考え、プレゼンテーションをすることには、さすがに最初は戸惑っていた。しかし、調べていくうちに多くの発見があったと一部の学生は述懐している。たとえば、中国の代表になり、プレゼンしたある学生はリアクションペーパーに次のようなことを書いた。

今回、僕は中国の六ヶ国協議における立場や思惑、そして関係各国とのなかや六ヶ国協議の歴史について調べました。

そこで、日本のニュースには出てこない非常に興味深いことを知ることができました。一つは中韓、中露関係です。反日教育を受けている国同士、仲がよいのだろうと思っていたけれど、領土、歴史問題でもめていて、中国が歴史や領土について文句を言うのは日本だけだと思っていたので、驚きました。

次に、六ヶ国協議の歴史についてです。最初は米朝間で解決させようとしていたこと、また、六ヶ国協議は1回集って第1回と数えると思っていたが、第4回からは数回に分けて行われていたことを初めて知りました。

今回は中国だけしか調べていないので、時間があれば他の国についても調べたいと思います。

授業開始時に配布されたプリントの内容が自分のプレゼン内容と重なるところが多くあって、内容が軽くなってしまったので、できれば、プレゼンの後にプリントを配布してほしかったです (11062639)。

学生が調べたことから得た充実感・満足感は上の感想文から十分に受け取れる。ちなみに、最後のところの授業開始時に配布されたプリントとはプレゼンをより順調に進めるために、私が用意した基礎知識の書かれたものである。学生のため、基礎知識を提供する必要があるが、しかしそれが発表者にとってはマイナスだという矛盾がこの学生のリアクションペーパーで分かった。実はこの問題の解決策を踏まえながら、模擬六ヶ国協議をよりよいものにしていくには学生たちもいろいろなことを考えてくれた。そのうち、次の提言を後期から実施しようと思っている。

クラスの中から、各国代表を選出し、各国の意見をしっかりと述べてもらいます。指名された学生だけが調べてくるのではなく、クラス全員、

一人一人に六ヶ国協議について調べてもらい、指名された各国代表以外には、その国の人たちに対する質問をしたり内容をメモにとったりという形で必ず参加してもらいます。個人で調べてきたことは、授業の最後に提出してもらいます。準備期間をきちんと設けることで、内容の濃いプレゼンテーションを行えるようにします（11042792 7月19日レポートより）。

また、次のような感想文も寄せられた。

日本の視点から六ヶ国協議について考えましたが、他の5ヶ国の意見を聴いて、一つの問題にさまざまな意見・視点があることに気がきました。ただ、やはり非核化、エネルギー問題、日朝関係正常化などの問題とともに、拉致問題解決の糸口を見つけ、動くことが日本の大きな課題であると思いました。経済制裁が糸口とは思えないし、時間をかけすぎではいけない問題なので、六ヶ国協議と二国間協議・交渉をうまく組み合わせながら、全体の進展を目指すことに積極的になってほしいと思いました（11044178）。

この学生の結論の是非はともかく、真面目に日本と関係の深い核問題をめぐる六ヶ国協議を真剣に考えたことがよくわかる。クラス全員が授業参加することによって、既存問題を確認し、解決策を探っていくというのが国際関係論（東北アジア）という科目の目的であり、また成果でもあると私は思う。

いずれにしても、学生の意見を吸収しながら、より積極的に学生を活用し、プレゼンや発表を授業にとりいれることが全員参加型授業に求められよう。

3. 質疑応答

質疑応答は授業に関する学生諸君からの質問に教員が答えるということである。ほんとうは授業の最後に教員は「本日の授業に関する質問があれば、どうぞ」と言って、学生が手を上げて質問してくれれば、答えるというのが良いが、日本の学生はそういう形を好まないように思う。けっきょく、リアクションペーパーを配布し、学生に書いてもらって、次の週に質問に答えるということにした。つまり、初回授業をのぞくと、私の授業では毎回学生の質問に答えるというコーナーが設けられているということである。しかも、質疑応答は授業の最初に行う。

リアクションペーパーを授業に取り入れたことについてある学生は次のように書いている。

リアクションペーパーの提出を出席カードの代わりとし、成績へも多少加味します。リアクションペーパーはその授業の感想を主としますが、授業の内容によって課題を出し、調べてもらうこともあります。これは授業をただ聴くだけという授業形態を防ぎ、全員参加型の形態をめざすためです。成績はリアクションペーパーによる出席点、課題提出、課題発表、試験を踏まえて評価します（11042792のレポートによる）。

私から見れば、リアクションペーパーを回収するメリットは少なくとも次の5項目があると思う。

- ①前回授業の復習
- ②学生の質問に答えることを通して、私の考えを学生に伝えること
- ③文章力を向上させるための練習
- ④時には、一部質の良い感想文を読みあげることで、学生に刺激を与え、次の勉強にもつながる

- ⑤何よりも、このリアクションペーパーを通して学生の状況（出席も含む）を把握できる

では、質疑応答に関する学生のリアクションペーパーの一部をのぞいてみよう。

- ・リアクションペーパーをもっと先生が発表してほしかった（11041528）
- ・他の学生たちの意見や感想が聴けるところがよかった。私だったら、考えつかなかったことなどが聴けていろいろ勉強になった（11043508）
- ・先生の話はためになることが多く、とても役に立った（12050871）
- ・毎回授業の最後に感想を書いた紙（リアクションペーパー）を提出し、次の授業で先生の意見が聴けたりして、学生一人一人の感想を少しでも先生に伝えられるところ（11062134）
- ・毎回授業の終わりの時、学生一人一人の考えを先生が集めて、質問などに一つ一つを答えてくれたことがとてもよかったと思う（11061670）
- ・私は普段授業中は寝ているが、この授業は寝ていなくて楽しく聴けた。また、授業の感想文を書くので、真剣に話を聴いた（12040247）
- ・学生の感想に対してリアクションがおもしろかった。おもしろいということはとても大事で、少なくとも授業自体がいやにはならないということであろう（11053132）

以上は回収されたリアクションペーパーの一部に過ぎないが、しかし、その積極的意見から分かるように、この方法は有効的で学生に受け入れられたように思う。先日経営学部部長樋口兼次教授も私にこのリアクションペーパーの導入を高く評価してくださった。実際に、先生の配慮は私のささやかな教育実験の支えとなっているので、この場を借りて、深くお礼を申し上げます。

いうまでもなく、少子高齢化にともなって、学生の要望も多様化してき

ている。専門知識を身につけるため、大学に来る学生もいれば、周りに流されて進学する者もいよう。また、場合によってはおもしろさを求めてきた学生もいるかもしれない。そういった要素を反映したか、リアクションペーパーの取り入れに対して改善を求める声もあった。

たとえば、次の意見が寄せられた。

先生の授業の進め方に対していくつか反対の意見とアドバイスを言わせてもらえば、まずはリアクションペーパーを書かせるときに、時間制限を設けるとよりよくなると思います。次に、毎回の授業開始時に行っている質疑応答の時間が長かったので、レジュメで一覧できるようにすれば効率よくスムーズに講義を進行できると思います（11062639）。

この意見を参考にしながら、今後の授業に取り組んでいきたい。

おわりに

これまでは主に学生から回収したリアクションペーパーを通して、グループディスカッション、質疑応答および学生の活用（プレゼンなど）の3項目により2007年度前期授業を振り返った。いうまでもなく、この3項目のみをもって、前期授業をコメントすることは早計である。また、学生はリアクションペーパーに自分の賛成意見を書いても、反対意見はあまり書かないということも十分に考えられる。しかしながら、それにしても、リアクションペーパーは授業に対する学生の意見を知る重要なルートであることに変わりない（もう一つは学生による授業評価アンケートである）。そこから多くのことを知ることができ、授業改善に役立っているのである。

また、全入時代に入るにつれ、大学間の競争が想像以上に厳しくなる中で、しっかりと学生の声に耳を傾け、実行性のある意見をどんどん取り入れていくことがますます必要不可欠になってくるに違いない。現に、白鷗

大学を含む日本のほとんどの大学では学生による授業評価制度が導入されたことは一つの証しであろう。

私は以上の問題意識に基づいてこのペーパーをまとめた。私が外国人講師ということもあって、学生とのコミュニケーションをとるために、日本の大学で教え始めて（1998年）からこうしたリアクションペーパーを取り入れてきた。正直に言うと、100人以上のクラスだと、毎週、学生のリアクションペーパーを読むだけでも大変な作業になる。しかし一方、学生にも言っているが、このリアクションペーパーを読むのは私の楽しみである。なぜならば、学生の授業への態度、何を考えているか、質問、私への要望など、さまざまな情報がこのリアクションペーパーに集約されているからである。今回のペーパーに限って言うと、次のようにまとめることができよう。

いうまでもないが、教員は教え、学生は学ぶという伝統的な「普通」の授業は必要である。現に、この方法は日本の大学の基本になっているといつてよからう。また、この方法は教員にとってもやりやすいし、学生にとっても小学校からずっとやってきた勉強法だったので、受け入れやすい。しかし一方、私はもっと学生のやる気を引き出す方法はないかといろいろ考え、最終的に思いついたのが全員参加型授業である。全員参加型授業のため、教員と学生との関係はホストとゲストとの関係ではなくなった。全員がファミリーの一人になるのである。学生の言葉を借りると、それは「アットホーム」な感じの授業（11050612 4月12日のリアクションペーパーにより）。このいわゆる私の教育理念のもとで実施したのがグループディスカッションであり、学生によるプレゼンテーションであり、質疑応答であった。

まず、グループディスカッション、プレゼンテーション等だが、多くの彼等はこうした方法を受け入れてくれた。その原因は高校までの授業と一味違った新鮮さはいうまでもないが、もっと重要なのはこのやり方を通して、専門知識はもちろんのこと、それ以外に、人生にとって、もっと大事

な考える力、書く力、聴く力、話す力といった総合的な能力をある程度つけられたからだと思われる。また、今、多くの会社はグループディスカッションによる面接方式を取り入れていると聴く。学生は社会の変化にとても敏感である。半期14回授業のうち3回のグループディスカッションを組み入れたが、「学生の能力を伸ばす授業なので、もっと増やしてほしい」といった学生の声がこれを如実に物語っている。したがって、条件の許す限り、大学により多くのグループディスカッション、プレゼンテーションなどの授業方式の導入を希望する。

それと同時に、授業科目やクラスの人数などの要素にもよるが、レッスン・プランつまり、テーマの設定、時間の配分、グループ分け、より多くの学生参加を周到に用意しておく必要がある。効率を向上させるために、さまざまな工夫が求められよう。そのうちの一つは学生数の制限にある。もちろん、大学側や教員としてはなるべく一人でも多くの学生に授業にてもらうのが筋である。しかし、グループディスカッションなどの性格からすれば、人数が多すぎると、中身が中道半端になってしまう恐れがある。したがって、学生にとってより充実した授業をするには受講者数を制限せざるを得ないという事情が出てくるかもしれない。具体的な人数について、私は50人くらいならちょうどいいのではないかと思う。多くても100人を超えないのが理想的であろう。ここ2、3年、経営学部と法学部とで半期ずつ講義してきたが、どちらかといえば、法学部のほうでより良い授業ができたような気がする（アンケートを参照されたい）。理由は多々あるが、人数がより少ないということが大きかったと考えられる（たとえば、2005年度の出席者は約40人、2006年度の出席者は約70人であった。ちなみに、経営学部2005年度、2006年度の出席者はそれぞれ約110名と130名であった）。また、学生もよりよい授業ができるように、いろいろ考えてくれた。今期の学生のなかに、この授業を現在の週1回の2単位から、週2回の4単位にしてほしいという声もあるが（11040231）、私の権限外のことなので、これ以上の議論はしないことにする。

以上、主に学生全員参加型授業について私の試みを紹介した。繰り返しになるが、この方法は伝統的な授業方式を否定しようとするものではなく、またそれはありえないと私は考える。この方法はあくまでも一種の試みであり、伝統的な授業を補完する方式に過ぎないと私は位置づけている。それにしても、授業の活性化によって、学生の学ぶ意欲を引き出し、大学を高校とは違う魅力あふれる場と彼等に思ってもらえるには、授業改革が一層求められると思わざるを得ない。

中国で大学教育を受けた私は、中国の教育に疑問視するところは多々ある（詳しく論ずるのは別の機会に譲る）。しかし、大学生は常に問題意識を持ち続け、解決策を探る努力を怠ってはならないという方針にはまったく賛成である。はっきり言って、グループディスカッションにしても、プレゼンテーションにしても、質疑応答を行っても、すべて学生のためのコース・デザインであり、彼等に問題意識を持たせ、解決策を探らせる手伝いにすぎないと考えられる。

ある学生のリアクションペーパーは次のことを書いてくれた。

この授業を受けて良かった！やはり、人と人との関わり合い、人々との話し合い、話を聴くことによって、ふれあいができるし、新たな自分の考えや成長をすることができる。それは日本人だけでなく、中国人、アメリカ人、さまざまな国々の人との関わり合いをもつことによって、さまざまな問題を日本人という視点からだけでなく、さまざまな国の視点から見るができるようになるので、自分もグローバルな人になりたいと思いました（11062912 7月12日）。

良い授業とは何か。人によって解釈が違う。しかし、学生により良い授業を提供することは教員にとっても、大学にとっても永遠の課題である。一概には言えないが、次の指摘は参考になるかと考えられる。良い授業のために、必要であると考えられる条件を箇条書きにすると次の通りである。

①よく分かる授業、②楽しい授業、③考えさせる授業、具体的に言うと、教師と学生との間にコミュニケーションがあること、学生を引き込んでいくこと、彼等が能動的に学習活動を行っていること、④学生が充実感をもてる授業、⑤自分が授業に参加していると実感できる授業（「良い授業の条件」より、<http://www.hum.titech.ac.jp/classes/jissyuu01/report2001/98-0127-9.html>）。確かに、リアクションペーパーだけを通して、学生すべてのことを正確に把握できるとは限らない。また、さまざまな理由で全員すべてが発表できることも難しい。また、より幅広くカバーできるグループディスカッションも決して完璧ではない。しかしながら、リアクションペーパー、プレゼンテーション、グループディスカッションといった方法は上に述べた良い授業の5つの条件にすべて合致すると信じる。いうまでもなく、授業は学生の反応に左右されるべきではない。むしろ逆である。しかし、彼等の状況をタイムリーに把握し、適切にその意見を授業に反映させていくことはどうしても必要であろう。これは学生にいいことを言うてもらうためではなく、より良い授業を彼等にこれから提供し続けるための基本条件であるからである。

謝辞

長年来、経営学部長樋口兼次教授に公私両面にわたり大変お世話になっております。心より厚く御礼を申し上げます。なお、このペーパーとかかわりのある本学学生に謝意を表します。また、日本語の校正に当っては、中央大学経済学部非常勤講師中島 敬氏の御助力を頂きました。謝意を申し上げます。

（本学経営学部非常勤講師）